

コリント人への手紙第二12章 「強いられた愚かさ」

1A パラダイスの幻 1-10

1B 主の幻と啓示 1-6

2B 肉体のとげ 7-10

2A パウロの悲しみ

1B 推薦 11-13

2B だまし取り 14-18

3B 自己弁護 19-21

本文

コリント人への手紙第二 12 章です。パウロは、コリントの人たちが偽使徒たちに惑わされ、パウロへの信頼を揺らがせていることを、10 章から最後の 13 章までに書いています。パウロの先の手紙に正しく応答した人々がいる中で、いつまでもその偽使徒と歩調を合わせている人々が一部にいたので、対処しなければいけなくなりました。それは、パウロにとってあまりにも愚かしいことでした。イエス・キリストの福音においては、神の恵みがあるので、そこにおいて互いに愛し合い、相手を敬う姿勢があるはずで、それがなくなっていました。

そこで、パウロは、その愚かでしかない議論に付き合わなくなりました。それは、肉において誇ることです。自分たちは大使徒から遣わされた者たちである、とか言っていました。そして、彼らの攻撃の矛先は、パウロがコリントの人たちから支援金を受け取っていないという事実に向かいました。そこで彼が真正な使徒ではないということを言っていたのでしょう。本当の使徒であれば、しっかりと生活の支援を受けているはずなのに、それを受けていないということは、正当な手続きを取っていない、もぐりの働き人だというような言い方をしていたのかもしれませんが。そしてかえって、パウロがコリントの人たちのことを心理的に操作して、何か巧妙にだまし取っているのではないか？という、逆の噂まで立っていました。パウロは、6 章で「あなたがたの思いの中で狭くなっているのです。」と言っていました(12 節)、心をパウロに閉ざせば、「坊主憎ければ、袈裟まで憎い」というように、パウロのしていることが、何が何でも、悪意に見えてきてしまったのです。

しかし、パウロは、一つは、親のようにして、コリントの人たちの信仰を育てようとして配慮をしていたことがあります。もう一つは、主の前で、良心をもって語ろうとしていました。心の内にあることを、主の前で語るように努めていました。このすれ違いを、手紙全体の中で見ることができます。一方ではキリストの愛をもって、牧会しようとしている姿。もう一方は、愛されていることに気づかず、心を狭くして、あまりにも当たり前のことさえ認められない、コリントの人たちの姿です。

1A パラダイスの幻 1-10

1B 主の幻と啓示 1-6

¹ 私は誇らずにはいられません。誇っても無益ですが、主の幻と啓示の話に入りましょう。

パウロは、これから、自分が主ご自身から受けた幻と啓示について話します。午前礼拝でもお話ししましたが、彼は、主イエスご自身に、ダマスコに向かう途上で会っていて、啓示を受けています。そして、宣教において、いろいろな場面で主の幻を受けています。それに対して、その偽使徒たちは、エルサレムの教会からのお墨付きがあるというような、人から出た権威を強調していました。

これは、誰でもあるのではないのでしょうか、どこそこの教会から来たのです、とか、だれだれから教わりましたとか、もちろん、それが事実であるならば、それを分かち合うことには何の問題もありません。けれども、それをもって、自分の言っていること、やっていることに権威付けすることは愚かなことです。それよりも、御霊による実が結ばれているかどうか？が試されます。愛による働き、労苦があるのかどうか？が大事です。言葉が上手であっても、真実と行いが伴っていなければ、それは愛していると言えません。だれが、自分の信仰を支え、助けてくれているのかを、少しでもふりかえれば、パウロがどれほど労してくれたかを認めることができるはずなのです。コリントの人たちは、その、主にある感謝がなかったのでしょう。たった今、抱いている自分の感情で物事を判断してしまいます。それで、親のように愛している主の奉仕者が、ああだこうだと盾ついています。

そこでパウロは、自分の福音の働きが主から来ているものであることを、主の啓示と幻を語らざるを得なくなりました。そのことによって、彼の語っている福音が主からのものであることを示す必要が出てきたのです。

² 私はキリストにある一人の人を知っています。この人は十四年前に、第三の天にまで引き上げられました。肉体のままであったのか、私は知りません。肉体を離れてであったのか、それも知りません。神がご存じます。³ 私はこのような人を知っています。肉体のままであったのか、肉体を離れてであったのか、私は知りません。神がご存じます。

この「ある一人の人」が、パウロであることは、続けて読んで行けば明らかです。パウロは、自分が天にまで引き上げられたことを語るのに、第三者のようにして語ることによって、自分を誇らせないように気をつけています。そして、彼は実に「十四年前」に起きた出来事を、この時に至るまで、他の人々に話したことがなかったようです。誇るならば、ただ、そのような主のすばらしい啓示が与えられたとして、自分自身の中だけで認めればよいだけです。知識や啓示は人を高ぶらせ、愛こそが、人々を養うからです。しかし、人々が信頼を揺るがしてしまっているならば、その愛による養いを続けていくためには、このことを話さざるをえなくなったのです。

「十四年前」ということで、いつのことか推測があります。その一つは、パウロとバルナバが、宣教旅行でリステラを訪れた時のことです。そこで、パウロは石打ちに遭いました。それで、彼らはパウロが死んだものと思って、町の外に引きずり出しています(使徒 14:19)。ところが、弟子たちがパウロを見ていると、なんと、彼は立ちあがって町に入って行きました。その死んでいると見なされていた間に、この体験をしたのかもしれない、という推測があります。この時なのか、確かなことは言えませんが、けれども、石打ちを受けているのですから、体に相当の損傷を受けているはずなので、それが肉体のとげのことか?と思うと、興味深いです。

パウロは、肉体を離れてであったのか、そうでないのか、自分自身では分からないということを、繰り返して話しています。次の体験が、あまりにもすごく、言葉にもならない状況だったので、判別できなかったのでしょう。

⁴ 彼はパラダイスに引き上げられて、言い表すこともできない、人間が語ることを許されていないことばを聞きました。

パラダイスにおけることばが、「言い表すこともできない、人間が語ることを許されていない」というものが、天のすばらしさを物語っています。使徒ヨハネも、黙示録の中で、力強い御使いが叫んだ後の声を書き記そうとした時に、書き記すなど命じられている場面があります。「10:4 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天からの声がこう言うのを聞いた。「七つの雷が語ったことは封じておけ。それを書き記すな。」これは、天におけることばが、あまりにもすばらしいので、人の言葉で言い表すものなら、その栄光の度合いを著しく減じることになるので、許されなかったのです。

ある人が、良い例えを教えてくださいました。生まれてからこの方、目が見えなかった子がいました。すぐれた医療技術で目が見えるようになりました。それで、その子は喜びのあまり泣きました。そしてお母さんに言ったのです。「どうして、空がこんなにも透き通っていることを、教えてくれなかったの? どんなに、お庭の花がきれいなのを教えてくれなかったの?」お母さんはいました、「言葉で言い表せないでしょ、その美しさは。」そのすばらしさは、人の言葉では到底、言い表すことができないのです。

どうりで、主の恵みと慈しみ触れると、人々は言葉を失います。ダビデは、詩篇で数多くの詩を書いたことが分かります。その感情にある、心の翳を上手に言い表しています。そのダビデをしてさえ、彼の世継ぎの子が神の国を受け継ぐこと、つまりキリストが彼から出てくることをナタンを通して告げられた時に、こう言いました。「Ⅱサム 7:20 ダビデはこの上、何を加えて、あなたに申し上げることができるでしょうか。」もう付け加える言葉がなかったのです。ですから、使徒たちは、言葉にするとちぐはぐな表現をもって、手紙を書いています。「エペ 3:18-19a すべての聖徒たちとともに

に、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、19a 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。」人知を超えているのに、知ることができるようにと祈っている、キリストの愛なのです。そして、「 I ペテ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」言葉に尽くせない、栄えに満ちた喜びです。

⁵ このような人のことを私は誇ります。しかし、私自身については、弱さ以外は誇りません。⁶ たとえ私が誇りたいと思ったとしても、愚か者とはならないでしょう。本当のことを語るからです。しかし、その啓示があまりにもすばらしいために、私について見ることに、私から聞くこと以上に、だれかが私を過大に評価するといけないので、私は誇ることを控えましょう。

パウロは気をつけて、「私自身については、弱さ以外は誇りません」と言っています。7 節以降に、自分が弱くされていて、そこに神の恵みが十分に与えられていることを話していきます。

そして、主の啓示については、本当のことなので、偽使徒たちの、はったりの誇りとは違い、愚かではないと言っています。けれども、人々が過大に評価することのないようにそのことを控えます。パウロは、神に近づくための特別な器などと、キリストによる仲介ではなく、その間にパウロ様が必要だ、というような持ち上げが起こりかねません。主から受けたものについて、主の恵みによる範囲で分かち合えば、そこには主のすばらしさが現れるので、分かち合うことはとても良いことです。人々の徳を高めます。けれどもそうでなければ、あたかも自分自身に霊的なすばらしさがあるかのような、勘違いを人々がしてしまいます。ですから、そういったことは控えるのが霊的な人です。

2B 肉体のとげ 7-10

そして次から、私たちが先週の礼拝で取り扱った箇所、肉体のとげについて、見ていきます。

⁷ その啓示のすばらしさのため高慢にならないように、私は肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高慢にならないように、私を打つためのサタンのはたらきです。

主の啓示によって高慢になったと言え、サタン自身がそうです。主のそばにいる御使いであったサタンは、その栄光のゆえに自分が、いと高き方のようになるとして、そこから追放されました。墮落しました。その高慢に道連れにするべく、エバを惑わしました。この善悪の木から実を取って食べれば、神のようになるとそそのかしました。こうして、高慢が人々の中に入り込みました。

しかし、ここではサタンのはたらきが、彼が高慢にならないように自分を打ったとパウロは言っています。一体これは、どういうことか？ 前回、それをじっくりと見ました。サタンによって肉体のとげが与えられたというと、ヨブです。ヨブの受けた、霊の攻撃は、神が自分に意地悪をしている、自分を呪

っていると思わせること。また自分が神を呪うことでした。パウロも、このような攻撃を受けていたのではないかと思います。主の啓示のあまりにもすばらしい体験をしたのに、このような目にあっているのは、よほど神は自分のことを嫌に違いない、と、思いそうになっていたかもしれません。

しかし、主がサタンの使いが、肉体のとげを与えることを許されたのは、もっとすばらしい神のご計画を知り、彼が謙虚なままであるためでした。サタンの攻撃でさえも、主はご自分の計画のために用いることができになるということです。

⁸この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。

パウロは、三度、願いました。三度ということは、祈りが聞かれているかどうか確認するための回数です。ペテロが、異邦人への救いを確認させるために、主が三度、天からふるしきを降ろす幻をお見せになりました。同じように祈りの中で、主が確かにこれが、みこころであることを示す答えをくださいます。

⁹しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

主は、私たちの祈りを聞かれない中で、本当の答えをくださいます。取り除いてくださいという願いは聞かれませんでした。恵みが十分に与えられているということと、弱さのうちにイエス様の力が完全に現れるということ、教えてくださったのです。

私たちは、肉体のとげのように、何か不自由なことになると、そこで恵みが不足しているのではないかと神は、自分に関心を寄せなくなったのではないかと感じてしまいます。けれども、恵みは十分にありました。そのような弱さの中で、主は良いことを行っておられます。そして、弱さの中にこそ、主がご自分の力を完全に現わしてください。聖書で、主のすばらしい啓示を受けた人々で、弱さの中に受けたことを思い出してください。ヤコブが、天からののはしごの夢を見たのは、エサウから命が狙われていて、逃げていた時のことです。パウロが、主イエスご自身に会ったのは、自分がキリスト者を迫害していた時です。最も怒られそうな時に、むしろ主は十分すぎるほどの恵みを示し、そして、ご自分の力を現わしたのです。

¹⁰ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

これで、なぜパウロが、このような弱さや苦しみを喜んでいるかがわかります。他の箇所でも、

「ロマ 5:2 神の栄光にあずかる望みを喜んでいますが。それだけでなく、苦難さえも喜んでいます。」
こうもいうことができるのは、主は、こういう時にこそ深い恵みを与え、ご自分の力を示してくださるからです。だから、弱い時にこそ、強いということができます。弱さの中に主の力が完全に働いているからです。

2A パウロの悲しみ

パウロは、ここで自分の誇りについて語るのをやめます。そして、このようにして自分を推薦するかのようことを、やらなければいけないようにさせた、コリントの人たちに対して問いかけます。どうしてそのような、自分に疑いをかけるような態度を取るのか？と問いかけを行っていきます。

1B 推薦 11-13

¹¹ 私は愚か者になってしまいました。あなたがたが無理に私をそうさせたのです。私は当然、あなたがたの推薦を受けてよかったはずです。私は、たとえ取るに足りない者であっても、あの大使徒たちに少しも劣るところはなかったのですから。

偽使徒たちが、自己推薦をして、同じ土俵に立たせられたパウロでした。しかし、元々、コリントの人たちこそが、パウロの働きに直接触れてきた当事者なのですから、彼らが対抗して、パウロを推薦すればよかったのです。ところが、彼らの言うことをコリントの人たちが容認したのです。これが常軌を逸しているわけであり、パウロが自分で自分を推薦しなければいけない状況に追い込まれたのです。

¹² 私は忍耐を尽くして、あなたがたの間で使徒としてのしるしを明らかにしました。しるしと不思議と力あるわざによってです。

パウロは、初めの十二使徒の一人ではありませんでした。三日目に復活されたイエス様を目撃した者でもありませんでした。その部分を偽使徒たちはついて来て、彼は本物の使徒ではない、自称使徒なのだと言った中傷したのです。実際に、イエス教団をキリスト教にしたのはパウロである、として、イエスはすばらしい教師だが、キリスト教は間違いだという意見は、世間においてよくある話です。すでに、当時からパウロに対する疑いが利用されています。

しかし、そうした疑いを払拭するために、新約聖書自体が気をつけて、パウロの使徒職を弁明しています。まず、パウロは、ダマスコに行く途上で、復活のイエスに会いました。イエス様の半兄弟のヤコブも、復活されたイエスを見たのは後になってからです。そして、パウロは、キリキアのタルソ生まれであります。エルサレムでガマリエルの師事の下、律法を徹底的に学び、また実践していたパリサイ派です。ベニヤミン族であることは明らかで、生粋のヘブル人です。

しかし、これらのこと以上に、大使徒と呼ばれている、ペテロやヨハネでさえも、自分たちには受け入れがたかった、異邦人に対する神の救いを、啓示によって受け取っていました。パウロも、同じ啓示を受けたのです。そこで、ペテロとヨハネ、またイエス様の半兄弟のヤコブも、交わりのしるしとして右手を差し出しています(ガラ 2:9)。ペテロは、第二の手紙でパウロのことを、「愛する兄弟」と呼んでいます。また、大使徒という言葉自体が、おそらく使徒たちは好きではなかったでしょう。最後に残った使徒ヨハネは、黙示録 1 章で自分のことを、「あなたがたの兄弟」と呼んで、他の信者たちと優劣をつけることを拒みました(1:9)。

このような、御霊の働きによって、主に示されたところに忠実になるところには、自分たちの人為的なつながりではない、自然と思いが一つになる一致があります。コリントの人たちにも、パウロとの間にそのような一致、しかも親子にあるような愛のつながりがあるはずなのです。ところが、彼らは心を狭くして、偽使徒とパウロを同列に置く愚かなことをしてしまいました。世において、明かに間違っているのに、そうした善悪で判断せず、表面的に平等をはかり、対立していること自体が間違っているとする悪しき判断基準があります。喧嘩両成敗と言いますね。彼らも、そのような過ちに陥っていたのです。

話が少しずれましたが、パウロは、復活のイエスに出会い、また、聖書の知識や実践においても、大使徒たちに劣ることはないのですが、もう一つ大事なことは、「しるしと不思議と力あるわざ」でありました。主が、地上で宣教の働きを行われた時に、悪霊を追い出す権威、人を癒やす権威をお与えになっていました。主ご自身が、みことばを語られ、そして、みことばに権威があることを示すために、これらの奇跡を行われていました。それを弟子たちに付与されたのです。

そして、よみがえられてから、弟子たちに、こう約束されています。「マル 16:17-18 信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばで語り、18 その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば癒やされます。」そして、マルコ伝の最後はこうしめくられています。「16:20 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるしをもって、確かなものとされた。」ここで、信じる者には、これこれのしるしが伴う、とイエス様が言われているので、必ずしも使徒たちだけに限定されるものではありませんが、みことばを語る時に、それを確かなものとするために、しるしが伴うというところに、使徒たちには、特に顕著であったということです。事実、パウロの働きには、著しいしるしと不思議が伴いました。そして、他の使徒にはない、イエス様の言葉の成就もありましたね。蛇をつかんでも害を受けることがなかったのは、彼がマルタ島にいた時に経験したことでした。

そして興味深いのは、「忍耐を尽くして」これらのしるしを行っていた、ということなのです。つまり、しるしや不思議がまるで魔術のように、人々を驚かせるために行ったのではなく、主のことばを確

かなものとするために、他の忍耐を要する奉仕と同じように行っていました。病人のために祈るのも、悪霊を追い出すのも、かなりの労力と忍耐を要したのです。そのようにして、確かに、コリントには、御霊の賜物が豊かにされて、キリストの教会が建て上げられたのです。

¹³ あなたがたが他の諸教会より劣っている点は何でしょうか。この私が、あなたがたに負担をかけなかったことだけではありませんか。この不正のことは赦してください。

ここですね、パウロが、これほど自分自身を主に献げて仕えていたコリントの教会で、彼はさらに一歩踏み出して、彼らのことを気づかって行っていたのが、金銭的な負担をかけなかったということです。天幕作りの仕事をしたり、またマケドニアの諸教会からの支援を受けながら、それで、生活費を賄っていました。他の諸教会では、彼の働きに対して物質的な支援を彼に対してしていたのですが、コリントはしなかったのです。それは、お金を巻き上げるような偽教師がはびこっている中で、キリストの福音は恵みであり、与えるものなのだとということをはっきりさせるために、敢えて支援金を受け取らなかったのです。

しかし、このことについて、「この不正のことは赦してください。」と謝っています。これは、もちろん皮肉です。けれども、あてこすりではなく、本当に、申し訳なかったと思っていたかもしれません。なぜなら、コリントの人たちにある問題は、云わば、「感謝の欠如」だったからです。これほど、愛されているのに、むしろ、愛されていることがわからなくなっていて、それで、反対の行動を取っているのです。近い人の親切ほど、その親切が分からなくなるものです。

私は個人的に、日本社会がその病にかかっていると感じています。つまり、あまりにも豊かにされ、人々が善意をもっていろいろなことを忠実にやっているのに、それが当たり前になっていて、恵まれていることが分からないのではないか？と思います。恵まれていない状況がなかったことで、それが想像できないのです。いろいろなものがあることに感謝できず、ないことに全神経が集中し、それで不満を溜めて、全体が見えなくなっていく。この日本に建てられているキリスト教会も、気をつけなければ、コリントの人たちのように、そのような「恵みを知らない世界」の影響を受けてしまいかねません。

2B だまし取り 14-18

¹⁴ 見なさい。私は、あなたがたのところに三度目の訪問をする準備ができていますが、あなたがたに負担はかけません。私が求めているのは、あなたがたが持っている物ではなく、あなたがた自身なのです。子が親のために蓄える必要はなく、親が子のために蓄えるべきです。

パウロの訪問は、「三度目」とあります。一度目はもちろん、パウロが初めにコリントを訪問した時で、使徒の働きに記されています。そして、二度目ですが、これは、この第二の手紙でしか分か

らないものです。第一の手紙は、エペソから書いていましたが、その後で大きな問題になって、彼がエペソから直接コリントに行き、厳しい処置を行ったと考えられます。そしてこれから、コリントに行こうとしています。だから三回目です。

そして、この時にも負担をかけないとパウロは、明言しています。その思いは、福音が福音として純粹に保つだけでなく、「子が親のために蓄える必要はなく、親が子のために蓄えるべきです。」という、親の思いなのです。親は、子から扶養されようと思って育てているのではなく、子の存在そのものが大事です。これと同じ思いを、コリントの人たちに対して抱いています。

¹⁵ 私は、あなたがたのたましいのために、大いに喜んで財を費やし、自分自身を使い尽くしましょう。私があるがたを愛すれば愛するほど、私はますます愛されなくなるのでしょうか。

ここですね、パウロが愛していけばそれだけ、彼らの心は離れていきます。これが、一体どういうことかという、ちょうど思春期です。まだ、自分が大人になりきれていない。心が混沌としています。その時に、親の愛は一番分かりません。親が心配をして、いろいろなことをしようとすると、かえって反発します。それでさらに成長して、落ち着いてくると、親がどれほど自分のことを愛してくれていたのかに、気づきます。すべて、いろいろしてくれたことに涙を流して感謝できます。しかし、コリントの人たちは、まだキリストにある幼子でした。それで、パウロの愛の気遣いが分からずに、かえって心を狭くして、彼が気づかうほど、むしろ、それを悪意にとっていったのです。

¹⁶ それならそれでよいとして、私はあなたがたに重荷を負わせませんでした。それでも私は、悪賢くて、あなたがたからだまし取ったと言われます。

どうして、これだけ献げていたパウロを、だまし取ったと非難できるのでしょうか？それは、献金を集めなさいということから？というのが、唯一、推測できることです。偽使徒たちが、そういったことをそそのかしていた可能性があります。

¹⁷ 私はあなたがたのところに人を遣わしましたが、そのうちのだれかによって、あなたがたをだますことがあったでしょうか。¹⁸ 私はテスにそちらに行くように頼み、あの兄弟もともに遣わしました。テスはあなたがたをだましたでしょうか。私たちは同じ心で歩んだではありませんか。同じ足跡をたどったではありませんか。

だまし取っていないことは、先に送っていたテスによって、はっきりとわかっています。また、テスのほかにも、兄弟を遣わしています。彼らがだましていないことは、あきらかです。同じ心で、同じ足跡をたどっている仲間であり、彼らが信頼できるのなら、パウロが信頼できないはずがありません。逆に、パウロが悪だくみをしていると言いたいなら、テスともう一人の兄弟も悪だくみをしてい

るということになります。これは、パウロにとって耐えがたいことです。彼らが疑われていることによって、自分自身も傷つきます。同労者なのです、同じ心になっているのですから。

私も、こういうことは何度となくあります。自分が仲間だと思っている人々、共に労している人が、いわれのない批判や非難を受けていたら、それは他人事ではありません。同じ思いになっているのですから、その人が受けていることは自分自身が受けているものです。

3B 自己弁護 19-21

¹⁹ あなたがたは、私たちがあなたがたに対して自己弁護をしているのだと、前からずっと思っていましたか。私たちは神の御前で、キリストにあって語っているのです。愛する者たち、すべてはあなたがたが成長するためなのです。

ここですね、パウロは、はっきりと彼らが勘違いしていることを指摘しています。彼らは心を狭くしているのです、パウロが自己弁護しているとしか見ていませんでした。けれども、パウロには二つの動機がありました。一つは、神の御前で、キリストにあって語っているということです。自己弁護ではなく、真実に、主に与えられたものを彼らに包み隠さず、話していたのです。もう一つは、彼らの成長を願って、愛の配慮をしていたことです。成長するためには、どうすればよいのか？ということを考えていました。

みなさんは、これまでパウロの手紙の文面を見て、なにか自己弁護しているように聞こえましたか？それとも、愛によって成長することを願って書いていると感じ取れましたか？同じ文章でも、人によって捉え方が違います。実はそれは、自分自身の心を映し出していると言ってもよいでしょう。自分が責められていると感じている時に、実は相手が自分を責めているのではなく、自分自身が自分を責めているのです。神の赦し、神の憐れみと恵みを、まだ十分に受け取っていないから、その愛の意図を読み取ることができないのです。

²⁰ 私は心配をしています。そちらに行ってみると、あなたがたは私が期待したような人たちでなく、私もあなたがたが期待したような者でなかった、ということにならないでしょうか。争い、ねたみ、憤り、党派心、悪口、陰口、高ぶり、混乱がありはしないでしょうか。

パウロには、複雑な思いがあったようです。彼らの多くは、パウロの先の手紙に正しく応答していました。「7:11 見なさい。神のみこころに添って悲しむこと、そのことが、あなたがたに、どれほどの熱心をもたらしたことでしょう。そればかりか、どれほどの弁明、憤り、恐れ、慕う思い、熱意、処罰をもたらしたことでしょう。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明しました。」こういともで言っていました。7章の最後の部分をぜひ、後で読んでみてください。パウロは彼らに全幅の信頼を寄せているし、テトスもそうなのです。けれども、偽使徒が

おり、一部に彼らについている残党がいるということなのでしょう。

その人たちはまだ、悔い改めていないのです。神のみこころに添って悲しんでいません。それで、以前の問題、つまり、争い、ねたみ、憤り、党派心、悪口、陰口、高ぶり、混乱を引き起こしています。私たちは絶えず、心を主にあって新たにしてもらわないといけません。かつて、そのような悪い心があっても、悔い改めて、心を洗い清めていただき、日々、内なる人を新たにさせていただく必要があります。しかし、古い種が残っていれば、それはまた成長して、その毒は自分を蝕んでいきます。せっかく前進したのに、後退して、自分自身を汚してはいけません。

²¹ 私が再びそちらに行くとき、私の神があなたがたの前で、私を恥じ入らせるのではないのでしょうか。そして、以前に罪を犯していながら、犯した汚れと淫らな行いと好色を悔い改めない多くの人たちのことを、私は嘆くことにならないのでしょうか。

第一の手紙から続いている、淫らな行いの問題です。近親相姦を行っている者は、罪を悔い改めたことは、第二の手紙で認めることができます。けれども、他に遊女のところに行っている者たちがいたことが、第一の手紙に書いてあります。こういったことを悔い改めるように、パウロは前の手紙で書いていました。未だ、罪を悔い改めていない者たちがいたようです。悔い改めないのであれば、いずれ教会から取り除かれてしまいます。自分自身が、はたして信仰に立っているのかを確かめてみないといけません。悔い改めないということは、実は自分の拠り所としているものが、福音以外になっている可能性があります。最後の 13 章は、パウロがそのこと、福音にあなたがたは信仰を果たして置いているのかどうか？それを吟味しなさいという、問いかけをしています。